
AUGUST HEAVEN

鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AUGUST HEAVEN

【Nコード】

N8818A

【作者名】

鳥

【あらすじ】

7月の終り、お互いに素顔を隠していた2人は出会い、再会してしまっただけ…。そして、戦いが始まる。

- 7 / 3 1 - p r o l o g u e (前書き)

かなり変な文章です(泣)。できたら感想おねがいします！

- 7 / 3 1 - p r o l o g u e

8月の終わり

私は――

自分の恋に気付いた……

A U G U S T H E A V E N

- P r o l o g u e 7 / 3 1 -

『――では、2度とこない人生の大切な時間を、有意義に過ごしてください』

長い演説を終え、校長が演台を離れていくのを見守った。

場所は体育館。

どこにでもある光景。

夏休みを明日に控えた終業日。

長い長い夏休みを前に、多くの生徒が胸に期待を込めている。

それを語り、共感しあい、教室まで戻っていく。

「ミキちゃん大丈夫？」

不意に声がかかる。

顔を覗き込んできたのは同じクラスの女子生徒だった。

「あ、うん。」

大丈夫だけど？」

私は杵島^{キシマ}ミキ

でも、これは本名じゃない。

そして私は本当の名前を持っていない。

「でも、こんなところで立ち止まるってのは……」

目の前に立つ同級生の顔が左へと向く。

倣って私もそちらを見た。

“男子トイレ”というプレートが目に入り、納得。

事実、私は悩み続けていた。

「具合でも悪いの？

そうは見えないけど」

「心配してくれてどうも。

見ての通り、私は大丈夫」

笑顔を作ってみせる。

「でも、ちょっと寝不足が続いてね。

今も少し眠いの」

付け加えて説明し、その説明に目の前の友達：カナミは納得していた。

「そうなんだ。大変だね。
何か悩みでもあるの？」

カナミはいつも恍けたような顔をしている。

茶髪の三つ編みが特徴の大人しい娘だ。

私は、そんなカナミが羨ましかった。

私の髪は、黒のベリーショート。

事情があるとはいえ、自由に髪を伸ばすことができない。

そしてカナミは天然でいながら鋭い。

「ちょっと……ね」

「深刻なの？
まさか、男？」

カナミの目が再びトイレの標識へと向く。

「え、いや、そういうことじゃなくて……」

「本当に？」

そんな、日常を繰り返し、

繰り返し、

繰り返す内、

私たちは帰路についた。

終業式ということもあって帰宅時間は早い。

いつもの通学路を通り、自宅のマンションへ戻る。

帰宅し、まず最初に電話を見る。

メッセージが吹き込まれていることを意味するランプ。

点滅していた。

「こんにちわ、京香よ。

これから事務で会いましょ。

待ってるわ」

事務的に用件を伝える声の持ち主の顔がすぐに浮かんだ。

（仕事か……）

ミキは制服から私服へ着替え、事務へ向かった。

港の倉庫。

しっかりとした施錠を施された倉庫に次々と車が集まっていた。

そのどれもが防弾加工を施された特殊車両ばかり。

元々は地元の造船・修理に用いられていた倉庫だったが、経営難や組合の弱体化に伴い経営・運搬・使用を停止、放棄された施設だ。

その中央に集まっている男たちがいた。

数は軽く20をオーバー！。

その中の短髪赤髪の角刈り頭が説明をしていた。

「10時間後に作戦を実行する！」

声が倉庫内に響き渡る。

「いいか！」

目標を手に入れたらすぐに集合地点を目指せ！」

男を囲んでいる他のメンバーが沈黙を装いながら頷く。

「立ちはだかる障害は排除せよ。」

ビビっている奴にはガンでも利かせてやれ！」

所々から笑いが漏れる。

素晴らしいパーティタイムの予感に胸躍る連中だ。

「ナポレオンも言っている。敵が失敗している時には邪魔するな。
だが、敵はプロだ。
失敗はないと思え！」

雄叫びが倉庫内に響いた。

ミキは事務のあるフロアのボタンを押した。

エレベーターが到着を告げ、廊下に出る。

慣れた足取りで通路を進み、自動ドアをくぐる。

そこに事務があつた。

事務の中もいくつかの部署に分かれている。

電話にメッセージを残した京香のいるデスクは、自動ドアをくぐって真っ直ぐ行ったところにある。

近付きながらミキは京香の姿を確認した。

京香もミキに気付き、口にしていたコーヒーを置いた。

「ハイ。どう？
体調の方は？」

「ちょっと寝不足だけど、大丈夫です」

「それは良かった」

笑顔を見せながら京香はミキに言った。

京香はミキよりも年上の女性だ。

金髪で青い目をしている。身長があり、ルックスも抜群で、今はグレイのスーツに身を包んでいる。

「学校の方はどう？上手くいつている？」

「はい。問題なんてありません。
楽しいです」

「今日は終業式だつて聞いたけど？」

「はい。学校は当然ありません」

「補習授業も？」

「はい」

質問と回答が繰返され、京香は本題に入った。

「じゃあ、早速仕事よ」

「はい」

京香は手元の資料を取り、自分のデスクを離れる。

いつものことだ。

仕事ができるかを聞き、出来るなら場所を変えてのミーティング。

もし、仕事が出来ないのであればそのまま帰路につく。

2人は通路を歩き続け、会議室へと向かった。

移動中、ミキはざっと資料に目を通した。

「カラワールド・テック社」

資料にある写真を見てミキ入った。

2人は会議室に辿り着き、京香は扉を閉める。

「ミキはその会社は何なのか知っている？」

会議室は2人を除けば無人だった。

部屋の中央には大きな円形のテーブル。

それを取り囲む多数の回転椅子。

京香が一番近くにある椅子に腰を下ろした。

「小さなコンピューター会社だったのは知っていますけど」

「他には？」

「前にヤクザとの関係があるって言われた話を聞きました」

「そう。」

他にも、密輸業者の出所、或いは隠れ蓑がそこだって話もあるし、密かに銃器を取り扱っているという噂もまま聞くのわ」

「今夜の任務はその現場を押さえることですか？」

「いえ」

京香は椅子を回し、会議室のスクリーンにある映像を投影した。

自分のデスクを離れる時、資料と一緒に持ってきたリモコンを操作し始める。

「つい最近耳にした情報なんだけど、カラウオールド社は兵器開発に
関与しているそうよ」

「兵器？」

それは銃器のたぐ——」

「どちらかと言うと、生体兵器の可能性が高いわ」

スクリーンには、カラウオールド社とその出入り口を通行する数台のトラックが映されていた。

その画面が物流リストに変わる。

「この何ヶ月かにカラウオールド社の研究施設に流れ込んできた物がこれらよ」

「チタン、セラミック……化学薬品も多いですね」

「金属類もね」

画面が下へとスクロールし、リストの最下部が表示される。

「これは？」

「半分から下はすべて精密機器よ」

「精密機器？」

「ここに映っている物は、主にパソコンのパーツとして使われる物がほとんどね」

「でも、パソコンの部品交換にそんなにパーツが必要なんですか？」

ミキの目が一部で止まる。

「それに、フロッピーディスクぐらい私にもわかります。何でそんな物を200万個も購入しているんでしょうか？」

リストは一番右にナンバー。その隣に品名。それから単品での値段、メーカー、購入数、宅配予定時刻が表示されていた。

「リストはもうひとつあるのよ。」

そっちの方では、CDを2000万枚購入しているし、他にも医療で用いられる機械まで取り寄せているわ」

「コンピューター会社のハズですよね？」

「それも、自ら開発するのではなく、海外からのパソコンを市場に提供する。それが、最近何かを作り始めている」

「依頼人は誰です？」

「同会社の研究者よ。研究内容までは教えてもらえなかったけど」

「どんな兵器なんですか？」

「それがわからないのよ。だから……」

「私はその兵器がどんな物なのか、情報拾ってくれば良いんですね？」

「……そうよ。」

「それが今夜の任務」

京香はスクリーンの画像を変えた。

映っているのはメガネの年寄りだ。

「彼が依頼人よ」

「罨、じゃないですよね？」

「それはないと思うわ」

京香はミキにそう言い聞かせた。

スクリーンに映されている依頼人の老人の名前は、

〔栗原 真人：クリハラ マコト〕

といった。

高速道路を都市方面に向かって走るトラックがあった。

側面に『久我トランスポート』のロゴが明記された2台トラック。

荷台には、指の数を越える人影が見られ、全員が同じ戦闘服に身を包んでいる。

「なあ」

「どうした？」

「今夜の戦場じゃ、レッドプール禁止だろ？その理由知らねえんだけど。聞いてるか？」

「研究者皆殺しにしたら、欲しいモンも手に入んねえし、張り合いのねえ奴らに向かって撃つのもつまんねえだろ？」

今夜決行される作戦を思い、既に昂ぶる者がいた。

そいつに答え返した奴は面倒臭そうに、もう一言だけ言った。

「せめて殺るんなら、雑魚より死神だろ？じゃなきゃ殺り合う意味すらねえ」

男達は笑った。

「そうだな。
死神に会いてえな！」

P M 1 6 : 5 8

会議場から出た京香とミキは、エレベーターに乗り込み、地下へと向かった。

その間、ミキの顔は曇っていた。

「本気なの？」

京香がその原因となった話題、その真意をミキに問いてきた。

「はい」

「理由は？」

「教えてもらえないかしら」

「それは……」

「どうしたの？
人に言えない事なの？」

「いえ。そういう訳じゃなくて、理由にならない理由だから……」

「なる、ならないの前に話してみなさい」

「怒りませんか？」

「それは聞いてみないと分からないわね」

「……………夢を見るんです」

「悪い夢なの？」

「わかりません」

「わからない？」

前みたいに、誰かの顔が夢に出てくるみたいなもの？」

「それに少し似ています。でも、人じゃなくて……」

言いかけ、エレベーターが到着を告げる。

通路に出て、ミキは続きを話した。

「顔のない人たちが出てくるんです。それも、死体で」

「死体？どういう事？」

「分からないんですけど……」

2人はコンクリートで覆われた通路を歩いていく。

「日を追うごとに、どんどん……こう、ゲームにあるシューティン
グみたいに画面が勝手に進む感じで……」

最近だと背景もハッキリと浮かび上がってきて」

「その夢が自分に何かを訴えているかのように思えるわけね？」

「訴える——か、どうか分かりませんが、何か、その……」

私の所為で死んだのかな、って思える夢なんです」

「そうなの。」

でも、あなたの活躍はこの国や、もしかしたら世界にも貢献して
いるかもしれないのよ？」

宥めるように京香が肩に手を置いていつてくる。

「ミキを妨害して死ぬ者たちは、テロリストか戦争屋・犯罪者だけ

よ？」

「でも」

「そんな気持ちで任務に臨んだら死ぬわよ」

突然険しい顔をつくり、京香が注意した。

「それに、仕事をやめようにも、辞職は死を意味するのよ。忘れたかしら？」

冷やかな口調でミキに言う。

ミキは俯き、足を止めた。

目的の場所を前にし、京香はドアの横にあるドアロックシステムにアクセスした。

「京香さん」

今まで聞いたことのない質問を思いつき、ミキは口にした。

「任務中に私が死んだら、どうなるんですか？」

網膜スキャンを受けながら京香は質問に答えた。

「そうね。」

冷たい話になるけど、まず証拠隠滅ということでミキがここに居た証拠は全て抹消。

あなたの自宅まで上がりこんで関連性を示す物全てを消し去るわね」

「私の代わりは、京香さんがやるんですか？」

「それは、無理よ。」

私はもう現場に立てない体になっちゃったから」

笑顔に戻り、それでも少し寂しげに京香は言った。

「じゃあ、そろそろ仕事に入りましょうか」

横にスライドして開いたドアを通り抜け、京香の後に続きミキも入室したそこは武器庫。

中は壁一面に銃器。

アサルトライフルから重火器の類

棚に銃器、刃物。

中には打撃武器まである。

小さな棚にグレネード類。

隔離された一角にはTNTの容器が見られる。

その他にも、様々な装備が部屋中に並べられていた。

「今夜は何事もなく終わるハズよ」

「じゃあ、それを期待して……」

「あはっ！

期待してって、あなたの活躍しだいなのよ？」

笑われた事を気にせず、ミキはハンドガンなどの装備を調達して

いく。

同じくして、京香も仕事モードへと入った。

「スタンも持って行きなさい」

「はい」

言われ、サプレッサーを入手したミキは、そのままグレネードの棚に向かった。

「今回は、コレだけで足りるかと……」

自分でチョイスした装備を京香に見せた。

FN 5 - 7。

トーラス444。

スタングレネード。

予備マガジンとスピードローター。

それからナイフ。

銃器ご法度の日本で、コレだけの装備を手に入れることは容易じ

やない。

それなのに、ここでは簡単に銃器を手にすることが出来る。

銃をホルスターに収め、バックにしまいこむ。

作戦の決行は、今夜。

8 / 1 A M 0 1 : 0 0

ミキはその時が来るまで静かに瞑想を続けた。

（私は普通じゃない…）

分かっているながらも、どこかでその事実を拒み続けている自分がいる。

普通の人のようになりたいと、幾度願っただろうか？

この任務も、終わる頃になればそういう感情でいっぱいになっているだろう。

この仕事は私の為じゃない。

空が闇に包まれた頃、ミキは瞑想を中断し、祈った。

いつか、本当の自由に出遭えますように……

ただ、知らないだけのミキはそう祈り続けてきた。

本当の名前さえ知らない自分のため。

そして、彼女の願いが叶うなど誰もが予想できないまま、任務は始まった。

- 7 / 3 1 - p r o l o g u e (後書き)

こんなチンケな作者の作品を読んでいただき、マジな気持でアリガトウゴサイマス!! 結構短かったので分かりにくい部分も多かったと思います! 早めに更新できるよう努力しますので! (T T 反省

いつも通り、誤字脱字あるかもしれません。すみません…orz

- 7 / 3 1 - P r o l o g u e o f a n o t h e r p e r s o n -

7 / 3 1

一週間以上の遅れを取り、終業式を迎えるこの高校は他から見れば変わっている仕組みだろう。

他の学校はすでに夏休みを迎えている。

今日が、終わる日・・・

夏休みを明日に控えた終業日。

昂ぶる気持ちを抑えることの出来なくなる、ある意味“特別”な日だ。

校長の演説を聞き終え、体育館から教室に戻って来る様々な生徒。

その一部。

とあるクラスで、

「さあ、告ってこい！」

クラスを縦横無尽に飛び交うざわめきの中で、声を抑えた複数の男子生徒が1人の男子生徒を後押ししていた。

「いや！ちよっ！！待っ！」

無理矢理押される生徒の名前を^{コトハネ}琴羽進^{ススム}と言う。

僅かに茶色みを混じえた黒髪と、蒼い瞳。

長い期間外国で生活した経歴を持つ男子生徒で、性格の良さから誰もが彼を善人という。

進のクラス内での地位は中間辺りで、勉強の成績も中間から少し下である。

外国で生活してただけあつて、英語の成績だけはいい。
その他は平均並みか、それ以下。

特に物理は・・・

そんな彼も、1人の男としてある女子のことが気になっている。

今、ホームルームが始まるまでの休み時間中に、親友の男子生徒全員が告白を勧めてきた。

改めて進の目が彼女に向く。

いま、彼女はどこか疲れたような雰囲気を漂わせ、自分の席で物憂げに考え込んでいた。

「夏休みになったらもうチャンスはない！
行くなら今しかないぞ？」

怪しい笑顔で言ってくる友人達。

彼らは、進が彼女に告白して『フラれる』か『OKの返事』をもらうか、その結果を楽しみにしているようだ。

おそらく、賭けもしているだろう。

「OKもらえりゃ、8月から天国だぞ！」

などと言ってくる。

軽く『天国』なんて言っているが・・・

本物の天国に召されそうになった進には、その感覚がよくわからないのである。

“嬉しくても天国にいける”という意味だろうか？

「行け！じゃなきゃ他の男に取られるぞ！」

そう言われ、進の目は彼女・杵島 ミキに向いた。

「アイツのどこにほれたか知らんが、杵島は外見的に結構モテらしいぜ?」

教室中がざわめきでこつた返しているため、この会話が聞かれる心配は無い。

小声で繰り広げられる会話ならなおさらだ。

が、やはり照れる。

「そついや、杵島のどこに惚れたんだよ?」

メガネの友人が聞き、杵島に目を向けた。

「確かに美人ではあるけど、あいつ今まで何人が告白蹴っているらしいぞ?」

「うそ!?!マジか?」

「そんな話初耳だよ・・・」

その話に進も軽く驚いた。

「付き合いが悪いなあ・・・」

別の友人が言った。

「確かに、そういう噂があったな。
で、進。」

杵島のドコに惚れたんだ？」

「全部、とかはナシだぞ」

「いや、それはちょっと・・・」

「何い？言えない恋ってかあ！？」

楽しそつに笑う友人。

正直、恥ずかしすぎて自分でも口にできない。

（運命的なものを感じるから・・・な）

と、言ったらどうなるだろうか？

そんなの分かりきっている。

100%馬鹿にされる。

その時、進の表情が変わった。

「・・・・・・・・・・实力だよ」

『実力う？』

友人一同が声をそろえて聞き返す。

「ああ・・・」

それから進は沈黙を続けた。

結局、ホームルームが始まるまでに告白することが出来なかった。

いや、しなかった。

帰路についた進はひとり考えていた。

冷静に考えてみる・・・

彼女は疲れたような顔をしていたし、あの場じゃタイミングが悪い。

だから、放課後に声をかけて話をしようと思った。

だが、進が動くよりも早く、彼女は下校・帰宅していた。

（はぁ・・・）

終業式だけあって下校時間は早い。

だが、彼女の下校は誰よりも早い。

（バイトでもやっているのかなぁ…）

《可能性は高いな》

いきなり、頭の中に声が響いた。

進は1人で考え込みたかったが、不可能だった。

《アイツの能力値からいって、不可能な仕事はほとんど無いしな》

そう言ってくるのは進の中に存在するもう1人の男だ。

正直、かなりうざい。

そして、その正体を進は知らない。

(君、さっき出てきたろ?)

進は友人との会話中のことを思い出す。

《助かっただろ?》

笑うような喋り方の男。

対照的に、進は沈んだ気分になっていた。

（友達の質問くらいなら簡単にはぐらかせたのに）

《いや、お前には無理だよ琴羽 進》

（ねえ、そろそろ名前くらい教・・・）

《いい加減にして欲しいのはこっちだ。何故、俺のことがわからない》

（知らないよ。

僕は君の事を知らないのに、君は僕を知っているなんて・・・不公平だよ）

この会話を声に出したら独り言になるだろう。

いないはずの相手との会話。

だが、進は例外だ。

声を出す・出さないに関係なく、自分の中のもう1人に声は届いている。

思うだけでもそいつは返答してくるのだ。

つまり、心に思ったことも、中にいるもう1人の誰かに読まれている。

心底うざりたい。

いやでも会話に発展することもあるため、独り言を夢見たこともあった。

《言えるうちに言っておきな、どうせ夜になったら主導権は俺のものなんだ》

（そ・・・そうとは限らないじゃないか）

《隠せないのは知っているだろう？

仕事が入ってる。そうだろう？

それも、今夜》

再び進の口から溜息が漏れた。

もう1人の彼が言うように、今夜も仕事が入っていた。

『新しい商品のテストをしたい』

それが、カラウオールド・テック社に協力している立場にいる進に送られたメールの内容だった。

進は、何故自分があのか会社に協力しているのか、その理由を知らない。

鍵を握っているのは、名も知らぬ自分の中の少年だった。

だが、未だに名前を聞くことさえ成功していないのが現状である。

重い足取りで彼は自宅へ急ごうと努力した。

物凄く遅い更新になってしまいました……

最早見ている人がいるかどうかも怪しいのに、それでも謝罪しなければと思いつつ、オキシドールと綿棒とゲンタシンと包帯と格闘している阿呆な作者です。orz
鳥です。

きつと頭のなかも鳩か雀くらいしかないのでしょうか、愚かなる鳥です。

あ、読み方は『ズイ・バード』です。

↓鳥(the bird)

生活に様々な事情がある故、更新が非常に遅くなります。なつています(TT)

どうかご容赦の程を……

出来たら許してください。

と、長くなりましたが、『AUGUST HEAVEN』久々にどうぞ。

って、大して書いていないんですけど o . . . r z

3年前。

世界はひとつの戦争を終えた。

日本

フランス

イギリス

中東諸国……

しかし、その戦争は国と国の争いではない。

国と国が手を取り合い、それぞれの国で、それぞれ特定の人間達を追った。

超局所的な戦争。

その発端、引き金はミサイルの誤作動。

些細な制御ミスが生んだ悲劇。

事故。

しかし、そんな理由を信じるものは1人も居ない。

誰も事故とは思っていない。

なぜなら、それは明らかかなテロだったからだ。

巧妙にミサイルの誤射と見せかけたものの、その狙いは明確。

着弾地点が、カイロ国際環境サミット会場だったこと。

各国軍部は協力体制を示し、臨戦態勢を整え、実行犯を突き止めた。

南アフリカ

ナイジェリア

ガーナ

スリランカ

潜伏先の候補として挙げたのがこの4カ国。

そのどこかにテロリストが潜伏している可能性が高い、と。

そして、正確にその正体を掴んだのである。

『半球革命軍』

それは多人種。

予想を遥かに上回る兵器の所有数。

最先端技術の結晶。

街を人質に立て籠もりや、

軍施設への直接突入・攻撃、

自爆テロを装った時間稼ぎなど、

使える者、物、

様々な戦法を用いて世界に戦いを挑んできた。

彼らは数万人規模という超巨大組織。

明確な目的は依然謎とされている。

「それが公開された情報の全て」

しかし、誰も知らないところでその戦争を造り上げている組織があった。

世界は彼らの思う通りに動かされていた。

彼らの思う通りに戦争が始まり、

描いた通りに消耗し、

そして彼らの通りに終末を迎えた。

それでも世界は動き続ける。

戦争と縁遠い国。

密接な国。

傷付いたからこそ戦争を拒む国。

平和な国で笑う人。

過酷な国で涙する人

残虐な国で死に行く人。

それでも世界は無情に動き続ける。

それが世界。

それが人類。

どんなに多くの人間が死のうと、

どれだけ多くの悲しみが生まれようと、

果てない戦いが繰り広げられようと、

それでも世界のどこかで何も知らずに生きていく人々はある。

生きている人たちはいる。

笑って、

楽しんで、

欲におぼれて、

死のうとする者だっている。

しかし、

望まないのに死していく人々もいる。

若くても死に、

強くても、

弱くても死に、

賢くても生き延びれるとは限らない。

理不尽に理不尽を重ね、

それに悲しみが混じり、

憎しみが混じり、

虚しさが混じり、募る。

「それが人」

「人類というシステム」

「本能さ」

わかっていながら、彼らは世界を影から動かした。

利益が目的じゃない。

ただ何となくやりたかった訳でもない。

ただ、そうすることが自分達の役目に思えたのだ。

停滞した世界に伊吹を。

凍結した世界に光を。

沈黙する世界に時間を与える。

「世界が僕らを包むのではない。
僕らが世界を包むのだ」

「支配」

「レジスト」

「背反」

「覆い、覆す」

それが彼ら。

その中に、究極の贅沢を求めるものが居た。

しかし今は居ない。

でも、確かに居た。

半年前までは……

「見つけた」

「何が？」

「それとも、誰を？」

「裏切り者さ」

「傭兵かい？」

「もしかすると、科学者の方かもしれない」

「よし」

「そうだな、ともかく」

「今をもって“お茶会”をやらを終了とするか」

「何でこんなことを楽しめるんだろうな？」

「言っただろ？」

人それぞれ。

苦痛とを感じる人間もいれば、道楽と解釈する人間もいる」

「冷たいね」

そうして、そいつ等のお茶会は終わった。

それぞれが使用した容器は廃棄。

テーブルも、イスも、カップも。

使用したものは全て処分された。

誰もその処理に反対しない。

なぜなら、もう2度とやろうとする者など、ただの1人もいないのだ。

要らないから捨てる。

だから、捨てた。

それだけ。

ただ、それだけ。

だから、要らないモノ。

まして、処分されるべき、

処分しなくてはいけない者を処分して何がおかしいか。

それも一筋縄ではいかないような者。

「どこにいるんだって？」

「どこだっけ？」

「どこだったか……」

「どこか聞いていいよ」

『ドコだ？』

全ての準備を整える。

答えが来た時、

全ての準備は整っていた。

「日本だ」

☐ Voice record :

7 / 3 1

1 2 : 3 4

From Canada

Panagaea's Secret Base
e Training Room . form th

逃げるのも自由。

死ぬのも自由。

奴は死を選んだ。

だが、自分は逃げることを選んだ。

選択は自由。

自由だから選択。

そんな常識的なことを、今更になって理解した。

選ぶ権利なんて最初から無いと思っていたからさ。

だから、それを理解できなかったんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8818a/>

AUGUST HEAVEN

2010年10月28日07時45分発行